

「愛読誌」を目指して



稲川 有徳

機関誌「ぶんせき」は1975年に当時の「分析化学 (Japan Analyst)」誌の再編により産声を上げました。同年1号の巻頭言では、当時の武内次夫会長が「本会と会員とを結びつける重要な役割をはたすこととなります」と述べています。内容も、「入門講座」, 「解説」, 「話題」, 「こんにちは」などといった今も脈々と続く記事をはじめ、国内外の分析化学に関する論文誌のタイトルサービスなども掲載されています。広告も50社以上掲載されており、いかに「ぶんせき」が会員各位にとって重要な情報源であったことが分かります。

創刊から50年、現在では、^{ぎよくせきこんこう}玉石混淆ではあるものの、検索エンジンや生成AIを利用すればいくらかでも欲しい情報を手に入れられます。図書館でChemical Abstractを用いて文献を探した時代は遠い昔となり、文献検索サイトでキーワードさえ打ち込めば目的の論文に簡単にたどり着けるようになりました。情報源が紙媒体から電子媒体に移ったいま、「ぶんせき」にできること、求められていることを再考するフェーズに入ったのかもしれません。

過日の第85回分析化学討論会の3誌合同展示ブースでは初めて読者アンケートを実施しました。「ぶんせき」を読んでいるという暖かい励ましがあつた一方で、記事の改善や提案も多くみられました。編集委員会でも、いただいたご意見に耳を傾け、新たな記事の獲得や企画の立案を進めることを検討しております。「ぶんせき」の価値を高めるためには何をすべきなのか、編集委員会の大きな課題の一つです。「入門講座」や「解説」は初学者や企業研究者からの支持が強く、今後も充実させていきます。その一方で、会員間の交流を潤滑にするという観点から、「コミュニティー・研究者」が分かる記事も必要なのではないかというご意見もありました。「情報源」と「会員交流のハブ」の両方が「ぶんせき」の役割であることを改めて認識しています。顔を合わせなくても会議や学会ができるようになった今だからこそ、「ぶんせき」の原点に回帰したいと思うのです。

「ぶんせき」には、これまでの諸先輩方が築き上げてきた日本の分析化学界の歩みが記録されています。そこには知識のみならず研究のヒント、そして研究者としての生き方も垣間見えます。何かあつたら真っ先に「ぶんせき」を手取る。何回も読んでしまう。そして老若男女問わず「分析化学の環」ができる。そんな「愛読誌」を目指して、編集委員会一丸となり業務を遂行したいと決意するこの頃です。

〔INAGAWA Arinori, 宇都宮大学工学部, ぶんせき編集副委員長〕